



「個々をより大切にする教育」

校長 池上 育志

休み時間の校庭では、今年度も大勢の子供たちがとても楽しそうにボール遊びをしたり鉄棒をしたり、走り回ったりしながら過ごしています。そのような様子を見て私も子供たちの元気があふれている光景にとてもうれしく思っております。

さて、昨年度から練馬区教育委員会(以下区教委)のお知らせでご承知のことと思いますが、今年度から新たな3学期制や特別支援教室が本校でも始まっております。今回は特別支援教室についてお伝えしたいと思います。昨年度末に区教委から「『情緒障害等通級指導学級』が『特別支援教室』に変わっていきます」との案内が配布され本校は今年度からの設定となりました。

特別支援教育も様々です。難聴・言語、情緒、知的と種類もあり、特別支援学校もあります。

特別支援教育がどのようなものであるかということ、どうしても「特別」の名称、響きがとりわけ違うものであるかのように思われてしまいがちのようです。ですが、今困っている子に、個々に応じて困り感を少なくしていく教育と考えていただければと思います。ですから、種類もあり終了もあります。

例えば、見え具合がよくない場合には補うためにめがねをかけます。聞き取りづらい場合には補聴器を利用します。この場合は、他の人から見ても困っている様子はわかりやすいものです。

人は生まれたときからすぐに、必ず様々な環境の中での生活を始めます。その環境毎で経験を積み重ねるので、それは当然一人一人が違います。時に、人との関わり具合に難しさが生じる場合でも、個々の生育歴から一概に何が起因しているかはわかりづらいことも少なくありません。また、学習場面においても、個々によっては、算数でも図形関係が苦手であったりとか、逆に図形関係はとても得意であったりすることもあります。ですが、それは、めがねや補聴器のように他の人が見てわかりやすいもので

はありません。人は誰でも得手不得手があるように、見た目ではわからない何かしら苦手なことや自信をもてないことがあります。とりわけ、人は失敗や困ることが続いてしまうと自尊心が低下してしまいます。このことは特別なことではありません。誰にでも起こりえることです。そして、この自尊心の低下がとても困ったことにつながりやすくなります。そこで、防がなければならなくなります。

特別支援教室では、人との関わり合いについての学習や、個別での学習指導、粗大運動や微細運動などの学習を行います。関わり合いに関しては、ソーシャルスキルトレーニング(SST)等の自立活動を行います。人とのより望ましい関わり合い方をシミュレーションなどを通して学びます。気持ちの落ち着きについては、見え具合や運動具合を改善していくことが改善に直結していくこともあります。特に、困っている本人の困り具合を少しでも軽くしていくことをねらっています。学校という集団生活では誰もがお互いの環境になっています。その意味では、自他を大切にしていく気持ちを育てていくことが重要です。これはまさに人権を大切にしていくことであり、社会生活に必要なことです。

特別支援教育とは、実は、特別ではなく、今、困っている人の困り具合を少しでも軽くしていくことをねらっているものです。また、互いに関わり合う社会の中においては特別ではなく、当たり前のことを皆が学んでいくことでもあります。

本校では「しろくまルーム」と名付けて5月23日の週より進めて参ります。関町小学校のかたくり学級の先生方が2名毎週本校にて勤務することになります。

今、困っている人の困り具合を改善していく教室です。同時に、全児童にも関係していく教育でもあるのです。

第32回オリンピック競技大会・東京2020パラリンピック競技大会は、開催都市東京で学ぶ児童にとって貴重な機会になるとともに、この経験は、生涯にわたる掛け替えのない財産となります。そのためには、オリンピック・パラリンピックについての理解を深め、児童が自分にできることは何かについて考え、十分学習した上で大会期間を迎え、その成果を持続させていくことが重要です。

そこで、平成28年度から、都内全公立学校でオリンピック・パラリンピック教育を進めていくこととなりました。「オリンピック・パラリンピックの精神」「スポーツ」「文化」「環境」の4つのテーマについて、体験したり調べたりして学んでいきます。